

『剣道—過去から未来へつなぐもの—』

東京都

代々木少年剣道会

中学3年生

納 富 香 梅

「なんのために、剣道やってるの？」

友達に聞かれたこの一言が、心にずっと引っかかっていた、私が剣道を習っていること、続けていることに理由がないわけではない。習い始めたきっかけも、きちんとあり、それを貫くまでは必ず続けることが、私の剣道の目標だった。目標を達成できない自分をふがいなく思った時も、友達から言われた「続けることも才能」という言葉に支えられ、とりあえず続ければ良いんだという勝手な解釈で、剣道を続けていたように思う。だから、剣道に対する理想を堂々と言える人に憧れつつも、試合に勝てない私には、剣道を語る資格なんてないと感じていた。

そんな悪い意味で無となっていた時、私は学校の授業で谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」という本に出会った。そこには、相手を思いやることの美しさ、全てを見ないことで本質を知ろうとすることの大切さが書かれていた。日本に古くから伝わっているものには、目に見えなくても、心の目で見るという思いやりが隠れている。これは日本特有の考え方だと思う。私達は思いやりの精神を堂々とは見せないが、心の奥底に隠し持っている。

では日本に古くからある、剣道はどうだろう。自分以外の誰かがいてくれることで成り立っている剣道は、相手を思いやらなければ成立しない。そのような相手を思いやる心が、礼に始まり礼に終わるといって表されるのだろう。相手がいてくれるからこそ生まれる感情に、私達は敬意を表するのだ。

話は変わるが、去年私の兄がオーストラリアへ行き、そこで剣道の打突の説明をしたそうだ。その時の兄は「おもてなしヒット」と言っただけらしい。それを聞いた時、家族で大爆笑をしたが、今はそれもあながち大外れではないのかもしれないと考えるようになった。なぜならば、自らの考えや思いを剣にのせ、相手はそれを受け取る。そうした心のやり取りを通じて、私達は自分自身を見つめられるからだ。剣道は、相手の心を通しながら、実は自分自身を見つめているという貴重な時間なのであり、そう考えると剣道の打突は、打たれたとしても悔しいだけでなく、お互いの「おもてなしヒット」となっているのではないか。打つ側も打たれる側も、相手を思いやる姿なのだと思う。それが日本の伝統であるおもてなしの姿、古くから重んじられ、谷崎潤一郎も大切にしてきた姿だ。

今の日本は世界を見つめ、スピード感のある時を刻んでいる。便利な物に囲まれて、世界中の価値観にも少しずつ触れる事ができる。色々な国との距離も近づいてきて、グローバル化が進んでいる中、私は日本特有の相手を思いやり、敬う気持ちを忘れてはいけないと思っている。過去から受け継いだその精神は、永久に続くと思われがちであるが、今のスピード感ある世の中においては、目に見えないものに永久なんて、ないように感じられてしまう。だからこそ私は、あえて相手を思いやり、敬う気持ちを意識して、未来へ、世界へ伝えていく必要があると考えるのだ。その、伝えるという覚悟が剣道を続けている今の私にはある。もし、再び友達に

「なんのために剣道やってるの？」

と、聞かれたとしても、今なら胸を張り答える事ができるだろう。

今の私にできること。それは、これからも剣道を続け、剣道の精神を、ひいては日本の良さを未来へ、世界へと伝えていくことにあるのではないかと思うのだ。これが今の私にできることであり、私が剣道を続ける意義だと信じて、私の剣道に対する、決意とさせていただきます。